

無私の先導者

正重区 田端宗寿（旧金谷村出身）

民俗学者の谷川健一氏が日本経済新聞に連載された「私の履歴書」のなかで沖繩の人頭税についての記述がありました。薩摩の支配下にあった琉球王府が宮古、八重山群島の住民に課した過酷な税制で、寛永十四年から明治三十六年に廃止されるまで、二六六年の水きに亘って島民を苦しめました。

その人頭税廃止運動の先頭に立ち、宮古島民の代表をひき連れて上京を果し、帝国議会に請願を繰り返すついに廃止を勝ち得た二十七才の若者、中村十作（板倉町出）について詳しく書かれていた。

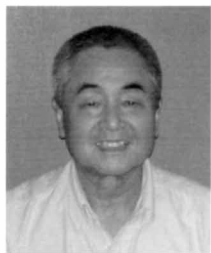
三十年ほど前に沖繩巡演のさい人頭税石に案内され、その石の高さ（一四三〇）より背が伸びた島民は性別、年齢を問わず課税の対象にされ、夫役賃、四十八種類、物産税などの重税に喘いでいたと説

明を受けた記憶がありませんが、上越の若者がその廃止に尽力していたとは知りませんでした。

中村十作は真珠養殖の夢を抱いて宮古島に渡りました。板倉の実家に事業資金の要請もし十分な資金も用意しました。御本木幸吉が養殖を目指す時期と前後するそうです。

中村十作は来島するまで人頭税という言葉すら知らなかったそうです。用意した資金を惜しげもなく提供し、島民を口説いて県令に訴え、上京して同郷の新聞記者増田義一（後に「実業之日本」社長）と共に当時のマスコミを動かし、多くの政治家を尋ね大隈重信から金一封も受けています。現地と東京で数々の妨害や官憲の脅しを乗り越えて、遂に明治二十八年に人頭税廃止法案が帝国議会を通過し

ました。



その後、中村十作は宮古島で水産組合をつくり、無人島で真珠養殖を始め成功を治めニューヨークやパリで商売をしたそうです。アメリカと日本の関係が悪化

し、青年の頃に抱いた夢は果されませんでした。人頭税廃止という大事業をなし遂げました。五十才で結婚した中村十作は妻にも、一緒に仕事をしていて妻の弟にも何も話さず、晩年に沖繩から送られて来た雑誌で知ったと言います。生前「私は自分が行なった事や言葉を反省し、余計な事は喋らないと固く決めている」と語ったと伝えられています。昭和十八年十一月二十二日、七十七才で波瀾に満ちた人生の幕を閉じました。

中村十作を調べるなかで、もう一人上越に関係のある人物が現れました。謙信公の末裔で最後の米沢藩主上杉茂憲で

す。二代目沖繩県令として家族を連れて赴任し、本島の隅すみまで巡回され作物のでき具合や生活について尋ねられたと巡回日誌に記されています。

久米島、宮古、八重山にも足を伸ばして実態調査して、内務省と大蔵省に「沖繩県上申書」を呈出し改革を求めています。然しあまりにも進歩的な考えに、なかく特権あぐらをかいていた支配層の反感を呼び、わずか二年で更迭されています。沖繩を去るに当り、未来を背負う若者の教育に望みをかけ、奨学金として当時としては大金三、〇〇〇円を寄付され、多くの指導者が果立っています。

明治時代に沖繩に係わった人々は、東北地方や雪国出身者が多く、輝く太陽の沖繩への憧れもあったでしょうが、それだけでは無い様にも感じられます。

上杉茂憲は奨学資金を置いて去り、中村十作は真珠養殖の準備資金を投げ出し



中村十作 (1867～1943)

ました。

谷川健一氏はこの人達は無私の心を持つていたと書いています。また東北の辿った歴史や文化に南国と共通するものがあり、沖縄の人々の苦しい現実の中に、自分たちにも通じた感情があったとも書いています。

谷川氏は東北人と南の人たちとの断ち切ることでできない固い絆は、自分の事を後まわしにして言葉より行動する無私の心があったからだと熱く語っています。人間が日常から飛躍し変化することをうまく説明できませんが、上杉茂憲県令は謙信公より代々伝えられた「第一義」の心があり、中村十作は配流の親鸞を支えた恵信尼の里で育ち、人間はすべて平等であるとの教えがあったと考えるのは我田引水すぎるでしょうか。

東京Jネットサロンでは同好の士が、中村十作の旧蹟を尋ねる旅行会を実施されたと同っています。参加された方々と感想も含めいろいろ語り合うことを楽しみにしています。

参考資料

「琉球沖縄史」沖縄歴史研究会、
日本経済新聞「私の履歴書」谷川健一、
筑摩書房「北国からの旅人」谷川健一



中村十作生家